

飛躍のメソッド

実力派公立校の手法



□□■下

グラウンドでナインを指導する神戸北・小川智仁監督の元へ、陸上部の部員がやってきて尋ねる。「先生、トラック練習を始めてもいいですか?」。許可を得た陸上部員たちは、守備位置についた内野手と外野手の間を縫うように、縦1列になって全力疾走を始める。マシンを使って打撃練習をしていた野球部員たちは、陸上部の邪魔にならないよう、すかさずバント練習に切り替える。

神戸北のグラウンドは、陸上部やサッカー部と共用。外野ノックが終われば、すぐ隣で細かいバスの練習をしていたサッカー部がスペースを使ってミニゲームを開始し、その間、ナインはゴロ捕球の練習に汗を流す。決して広いとは言

神戸北

えないスペースを譲り合って使うのは、日常的な光景だ。

就任12年目の小川監督の下、3年前の秋に県大会で久々の勝利を挙げて存在感を示し、今春は神戸地区大会で長田、県大会では昨秋8強の東播磨と、同じ公立の実力校を退けてベスト16に進出。9年ぶりに夏の第1シード権を獲得した。

学校が定める完全半校時刻は午後7時。照明設備はなく、冬場は日が暮れば本格的な練習は難しい。場所と時間に制約がある中、チームはいかに効率よく練習に集中するかを追求してきた。私学のほか、同じ公

立校でも明石商や社は広い。大空主将はきつぱりと言いますが、花本「制約があるからこそ、



手狭な校庭 効率で勝負

時間を無駄にしない」エースで4番を務めるチームの大黒柱、松村恒司も限られた練習環境で自らを鍛えてきた。冬場は学校近くの山にある270段もの階段を全力でダッシュ。チーム内で「ゴンザレス」と呼ばれる過酷なトレーニングを繰り返し、松村は「下半身がしつかりしたことで、投球のスピードや切れが増した」と自信をのぞかせる。

前回第1シードとして挑んだ2010年は初戦の2回戦で延長十五回の末に涙をのんだ。「強豪私学との差はあるが、伸びしろがあり、まだまだ強くなれる」ということ。挑戦者としてはねのけたい」と指揮官。手狭な校庭で磨いた力で、今夏こそ旋風を巻き起こす。

(長江優次)

全国高校野球兵庫大会 6日開幕

走塁練習に汗を流す神戸北ナイン。すぐ後ろではサッカー部が練習に励む。神戸市北区の同校